

経営と健康



大河ドラマ 葛屋重三郎 (下)

講談師 一龍齋貞花

今年^{きとど}は乙巳 60年に一度の縁起のよい金運の年。お財布に渋沢栄一さんが一杯になるといいですね。

大河ドラマは、名プロデューズによって一時代を成した葛屋重三郎。

ジャポニズム

田沼意次の華やかな享樂的時代。町人も余裕があり文化が発展。

日本が初めて参加したパリ万博に東洲齋写楽、喜多川歌麿だけでなく、葛飾北斎、歌川広重の浮世絵が出品されるや、たちまちヨーロッパの画家たちの間にジャポニズムブームをまき起こし、浮世絵の構図の大胆さが西洋の画家に大きな影響を与え、ゴッホ、モネ、マネ、ドガ、セザンヌといった一流の画家が影響を受け、ゴッホにいたっては自

分の絵の背景に浮世絵の美人の絵を描き入れているほど。

画狂老人と言われる北斎を次の時代のスターと見出します。素質を認めて自由に描かせ富嶽三十六景、中でも大波の中に富士山と漁師の小船が小さく描かれた大胆な構図。新券の千円札の裏面を飾り、昨年5月ニューヨークで富嶽三十六景全46作品が競売にかけられ5億3700万円で落札され、「俺のプロデューズした絵ではないが、さも「ありなん」と笑っていることでしょう。

重三郎48歳で亡くなったため北斎の大々的なプロデューズは出来ませんでした。見出したのは重三郎です。

睡蓮で有名なフランスパリ郊外ジベールニーのモネの屋敷には、写楽、歌麿、北斎、広重などの絵が展示されていて、ことに広重の版面に魅了され、東海

道五十三次でない絵が展示されていて、「広重、こんな絵も描いていたのか」と皆が感心。日本人が外国の地モネの庭を見に行つて改めて、日本の浮世絵の評価の高さを知りました。実は私もその一人です。

テレビドラマも、重三郎が主人公でないものの写楽は誰だ、何者だなどこうした巨匠を世に送り出した重三郎。書物問屋の株を手に入れ、出版面だけでなく流通面のメリットも大きく営業力を強化、黄表紙本、洒落本、滑稽本、富本節などの歌本、浮世絵から学術書、仏教その他あらゆる本を手掛けた大出版社。

「耕書堂へ行けばほしい本がなんでもあるぞ」

「本も貸してくれる、便利じゃねえか」

寛政の改革により暗転

田沼時代は、贅沢三昧、贈収賄も当り前。ところが天明3年大地震、浅間山の噴火、大水害と天変地異が続き大飢饉により米の価格高騰などにより政治への不満が高まり全国に二揆勃発。その上意次を登用した十代徳川家治が急死。わずか3百石の軽輩から幕府のトップに登りつめたことへのねたみが反感を増大させ、遂に老中辞職。意次の放漫政治として長らく批判されていましたが、最近見直されてもいます。

宝暦8年白河藩主松平定信が老中首座に就任。

「贅沢廃止令、寛政の改革を行う。町人が絹の着物を着てはならん。役人は絶対に賄賂を受け取ってはならん、贈った者も罰する。黄表紙や洒落本を

執筆し狂歌を詠んで政を風刺する武士も多く、これこそ武士の退廃である」

「こりや大変なことになります。私など一番に目をつけられる。気をつけます」と。四方赤良こと太田南畝は武士でしたから身の危険を感じ、狂歌は続けたものの風刺はしない。

お家騒動物など以外の外。政を風刺しようものなら立所にお召し取り。

浮世絵が評判になりモデルの名前が江戸中に知れ渡っていたところから歌麿への監視の目が厳しくなる。廓を舞台にした作品、春画、歌麿や写楽をはじめとする浮世絵は世の中を退廃させるからと発行禁止。美人画の女性の名前を書いてはいかん。遊女はいいが町娘を描いてはいかんとアイドル禁止令。

重三郎の店で1年4か月程お抱えとして、その後どんどん名を上げた山東京伝は、手鎖50日の処罰を受け洒落本は絶版。

「葛屋重三郎、その方絵師、狂歌師をそそのかし世間を扇動、騒がせた罪軽からずよって財産半分没収、地所を召し上げる左様心得よ」

財産半分に地所、出版社まで取り上げられてしまった。

「娘一寸待て、着物の裏地に贅沢な絹を使っておらんか調べる」

岡っ引きが町娘の着物の裾を十手ではね上げ、下着をつけておりませんかニヤツと笑う。完全なセクハラ、役得とやりたい放題。これじゃ庶民の不満がつるばかり。

自由な雰囲気の下発展した経済、文化が二転。

〴〵白河の清きに魚も棲みかねて、元の濁りの田沼恋しき。

寛政の改革を風刺し、田沼時代を懐かしむ落首があちこちに。

「べらぼうめ、こりや面白い、こんな落首が出るんだ。弾圧に負けてなるものか」と、重三郎の反骨心むくむく頭をもたげ、お抱えの人気作家朋誠堂喜三三に

「幕府の弾圧に庶民がうつつしている。どうだい庶民の気持ちを代弁する黄表紙を書かねえか」

「私も武士です。勘弁して下さい」
「責任は持つ。前金4割払おうじゃねえか。お得意の黄表紙本頼むよ」

かくして天明8年出版の「文武二道万石通」、挿絵は歌麿門人行麿。

畠山重忠と源頼朝をモデルにした風

刺を込めた作品。

「おう待ってたよ。朋誠堂の黄表紙、これ読まなきゃ江戸っ子じゃねえ」と大人数で、滝沢馬琴は「古今未曾有の大流行」と評し、喜三三の代表作に。政を風刺した黄表紙ですからたちまち幕府から目をつけられ、

「政を批判するとはけしからん」 修正させられたり、遂には出版停止。

喜三三は武士でしたから、「わたしはこれ以上書くのをやめます。旦那勘弁して下さい」と、筆を折ります。

これまで時代を読み、世に出せたものが出版できなくなりました。代わって娯楽小説、代表作品が馬琴の「南総里見八犬伝」です。

「べらぼうめ、負けてなるものか、立ち上がってみせる、なにかやり方があるはずだ」 日夜思索していたが、いつか重三郎の身体を病魔がむしばんでおりました。脚氣でした。明治、大正時代も脚氣で亡くなる者が多かった。

寛政9年病状悪化、幕府の統制に対する心の疲れもあったのでしよう。寛政9年（1797）5月6日、

「わしは午の刻（昼の12時）に死ぬだろう。馬琴と一九が中、心となって出版を続けてくれ。店は番頭の勇助が二代目

となつて継いでくれ」

こう予告するも死は訪れません。

「自分の人生は終わったが、未だ命の終りを告げる拍子木が鳴らねえ」と、歌舞伎の舞台にたとえいかにも江戸っ子らしく洒落ています。その日の夕方48歳の若さで旅立ちました。妻はそれから30年後に亡くなり長寿でした。

通油町に店があつたのは文化9年まで。その後小伝馬町三丁目、横山町はじめ移転を繰り返して、耕書堂は地本問屋として五代目まで出版事業を続けたものの大きな活動はありませんでした。私が所持する明治元年の英語の学術書に葛屋の名が載っています。面倒見がよく人の才能を見抜き、写楽、歌麿、北斎、広重、一九、山東京伝、曲亭馬琴をはじめ多くの人材を世に送り出し、浮世絵がジャポニズムとヨーロッパにブームをまき起し江戸文化を後世に残した重三郎。重三郎のプロデューサーあつたればこそ。

お墓は吉原近くの正法寺に、戒名は幽玄院義山日盛信士。日本橋大伝馬町本町通りに耕書堂の説明版があります。時代に先駆けた江戸の名プロデューサー 葛屋重三郎の一席。